

南方（ビルマ）

ビルマ戦線敗走労苦の思い出話

愛媛県 今井善範

私は昭和十五年徴集で第二補充兵として、昭和十七年八月十日教育召集により、普通寺の西部第三十九部隊（輜重兵）山本隊へ入隊し、一一〇日間の教育訓練を受け、召集解除帰郷しました。その当時の私の家族は、

父	健在	農業
母	〃	〃
姉一人	〃	〃
本人	〃	〃

妹三人 健在 全員小学生

であり、私が応召して家を出ると一寸苦しい状態でした。でも時局柄軍人となって御奉公出来ることは、男子の本懐であり、父は「後は心配せず元気で頑張つて来い」と励ましてくれ、部落の大勢の人々に見送られて勇躍入隊致しました。一家七人の家族で約一町五反の田畑で米麦を主とした農家でありました。

入隊後は輜重兵の本科教育を受け、先ず乗馬訓練です。憧れのサーベル、長靴は既に無く、ごぼう剣、編上靴で何とも格好がつかないことでした。次は近所の大麻山の演習場で鞍馬訓練で、車両をつけ、弾薬、食糧の輸送訓練が主でした。とにかく馬の手入れが大変なことで、今振り返っても、ただもうえらかったという記憶だけです。内務班の戦友、古兵にはまあまあお

世話になったと思います。また、この在隊中に父親がわざわざ面会に来て呉れたことは、苦しい状態の中で嬉しく心の和む思い出となっています。満期除隊して帰郷後はまた家業の農業に復帰しました。

次に昭和十八年十月十日、充員召集令状によって再び善通寺の西部第三十九部隊（輜重兵）へ入隊しました。約四〇〇名位の人員が共に入ったと思います。十月二十日、原隊出発、坂出港で船に乗りました。人間のみで馬は乗船しません。広島の子品港に入り、三隻位の船団を組み上海へと出港、数日後に上海入港上陸、栄安宿舎に入り、約一ヵ月滞在し、その間は外出は無くて、ただもう食うては寝るのみの退屈な毎日でした。その後、石炭船を改造した小さな船「マレー丸（一五〇〇トン位）」に乗り、約五〇隻位の船団になって台湾の高雄へ寄港し、十二月早々一路シンガポールへ向けて出発しました。海上輸送の途中は敵の潜水艦攻撃をさけて、鳥かげや安全な所へ寄って十二月二十五日、やっとシンガポールへ着きました。「やれやれ無事に着いたよかったよかった」と喜び勇んで上陸。

昭和十九年一月二日、中支より先に来ていたビルマ派遣軍第五三七二部隊（部隊長折田中将）第一中隊徒歩小隊へ転属編入されました。この部隊は独立輜重兵第二連隊と称し、熊本を中心にして広島、鳥根、善通寺等で混成編成した隊でした。

シンガポールからは列車輸送となり、目的は有名なインパール作戦に参加ということで、泰緬鉄道を利用し、約一週間位進んでトンギーで止まりました。その間列車は前進と停止を頻繁に繰り返し、さらにまた約一週間程でマンダレーで下車した。

私たちは輜重部隊の中の徒歩（護衛）小隊に入り、兵器といえば三八式歩兵銃があるのみの貧弱な武器でした。敵は英印軍でその装備は優秀です。こちらが一発射つと敵は数百発も打ち返してくる。戦車は来る。砲弾もくる。飛行機も数多い。制空権も敵が握っている。もう圧倒的に兵力の優劣がはっきりしていた。

日本軍はジャングルの中に隠れているが、敵の砲弾でラワンの大木がポキポキ折れ飛ぶ、敵の飛行機からの機銃掃射で味方の損害は増加の一方。それに加えて

食糧の大不足です。栄養失調とマラリヤで健兵は非常に少ない。約四〇〇人の内二五〇人が死亡したように思う。行軍をすると一〇〇メートルごとに友軍の死体があり、中には未だ息のあるものもある。正にもう地獄そのものでした。

友軍のそんな大変な惨状であるが、どうしようもない。豪雨と空腹とマラリヤと泥濘の道では処置なし。我が身一つを隊列から遅れぬよう運ぶのが精一杯。

こうして悪戦苦闘の限界をさまよいながら漸くインパール北方の要衝コヒマまで北進し停止しました。コヒマには昭和十九年の四月頃でしょうか、約一ヵ月間駐留し、その間「弾薬監視」という歩哨勤務でした。最前の第一線で敵と撃ち合う戦闘はしませんでした。

コヒマにいた間に敵の反攻はますます盛んに強くなってくるので、これ以上はもう駄目ということで反転作戦に移りました。名前は反転ですが、実際は退却です。雨季にはなる、馬は死んでしまった。車はない、空襲はくる、唯もう歩くだけ。靴も駄目になり、申し訳ないが戦死者の靴を拝借したり、もう散々の体たらくで、

南へ南へと歩きました。私の感じとしては支那事変の「土と兵隊」「麦と兵隊」以上の悪い辛い状況で、「白骨街道」とか、「どくろ街道」とか忌み嫌う行軍を続けてどうにかモールメンに辿り着きました。

途中でマラリヤのためマンダレーの病院へ約二ヵ月入院し、退院してから原隊へ追及をしました。これがまた大変で、あちこちで原隊の所在を尋ねて、やっとその地点まで来ると、部隊は既に出発後、「それっ」と、また追及のピッチをあげて（実はそうは言ってもノロノロで、気ばかり焦って）その次へ着くとまたそこにはいない。後から追及する身の悲しさ苦しさを嫌という程に思い知らされました。

ただそんな苦しい時に有難かったのは、烏谷伍長といういろいろすべてに明るい達者な人のお陰で、最後にやっと原隊へ追い着きました。今思い出しても、「よくもまあ、地獄を通り抜けて、生き延びたものよ。不幸にも亡くなった戦友やその遺家族の方に何とも申し訳ないことよ」との切ない思いで一杯です。

モールメンで天皇陛下の玉音放送を聞きました。「や

れやれもう戦争は終わった。どうやら生きて帰れるぞ。それにしても日本が負けて今からどうなるのだろうか。」等等と安心と不安、いろいろの思いが入り乱れて皆顔を見合わせておりました。

その中に、武装解除を受けました。敵の弾丸がとんで来ないので楽になりました。約四ヵ月位タイのバンコクへ向かって歩きました。シラミが湧いたり、バンコクでは仮兵舎を造ったり、捕虜生活を送りました。

昭和二十一年五月二十日に「泰春丸(八〇〇トン)」に乗り、一路横須賀へ、六月三、四日にかけて上陸、DDTの消毒を受けたり検疫とかで約一週間の後、列車で松山へ復員しました。

鉄道の沿線は車窓から見ると、空襲、戦災の跡も生々しいのを見ては故郷の心配をしていました。松山へ着くとここもまた丸焼けで、気も自然と滅入り、松前の自宅へ戦友と二人トポトボと歩いて帰りました。やっと懐かしいわが家の無事な状態を見た時の嬉しさは、今も忘れません。家族も全員元気で(姉は既に結婚して他家へ)、手を振り、身を抱き締めて感激の対

面でした。丁度田植え時の頃でした。私も二十七歳になつておりました。マラリヤは復員帰宅後二年間に二回位出ましたが、それだけで現在まで元気で農業に精出しております。

私の従軍、出征を振り返って見ると、

1 人間関係はよかった。感謝している。古兵、上官も大事にしてくれた。

2 弾薬はまあまあ。

3 食糧は大不足。

4 健康は栄養失調とマラリヤに苦しんだ。これも大多数の者がやられたので、自分独りではない。

運のよかつた者として不平は言えない。

5 恐いことで強く印象に残っている事は、コヒマより反転してマンガレーの手前まで来た時のこと、一個分隊位で大休止の際、敵の戦車二台が轟音を立てて、接近して来た。弾丸は射たれなかつたが、夕方の薄暗い時間で全員クモの子を散らすように逃げてこと無きを得た。よかつた。最後に「お世話になつた人(敬称略)」

横川 軍医 石川県

那佐 小隊長 徳島県

藤本 分隊長 愛媛県

千治松 分隊長 広島県

矢野 伍長 愛媛県

赤瀬 伍長 〃

松本 伍長 〃

鳥谷 伍長 〃

「思い出の同期」

大西 兵長 徳島県

佐藤 上等兵 愛媛県

神野亀義 上等兵 〃 (戦死)

ビルマ撤退作戦 菊兵团従軍記

福岡県 草場 憲 輔

昭和十三年十二月十日、歩兵第二十四連隊留守隊に
現役兵として入隊。昭和十四年三月一等兵、同年十月

上等兵勤務、十二月十日伍長勤務上等兵を命ぜられる。
昭和十五年任官、陸軍伍長となり、同日予備役に編入
され即日臨時召集。

昭和十六年十二月、松井連隊長以下龍部隊として編
成出動。その後、留守部隊編成のため残留し、昭和十
七年四月陸軍軍曹、同年四月九日、編成完了。

昭和十七年四月九日召集解除された。これは松井連
隊長以下南方に出動したので、その留守部隊の編成の
ため残留され、編成完了したことから召集解除されて、
二年間自宅に帰ることになったのです。

昭和十九年二月、ニューギニア要員として歩兵第一
四八連隊に臨時召集されたが、一ヵ月待機の後召集解
除される。輸送船が全滅、輸送の方途が当分つかなく
なったからである。

昭和十九年七月、久留米の歩兵第一四八連隊に応召、
永松少尉以下五二〇名中の先任下士官として従軍。七
月十二日門司港出帆、途中約一ヵ月を要して漸くバシ
イ海峡を遠く望むことができたが、他の船団が敵潜水
艦の攻撃に遭い撃沈される被害が出た。しかし幸にし